書評「勝者の代償」

大竹文雄
（『週刊　東洋経済』2002 年 8 月 31 日掲載）

欲しいものがどこにいても安く手に入る便利な世の中になった。同時に、我々は雇用不安と所得格差の高まり、長時間労働と家族やコミュニティの崩壊に悩まされている。われわれは便利で豊かなになったのに、どうして忙しく働き続けるのだろうか。どうして将来不安が高まったのだろうか。

著者のライシュは、このような社会の大きな変化を明快に描写し、その変化が近年の技術革新によってもたらされていることを説得的に示している。著者が描写しているのは、アメリカ社会であるが、その多くは日本にもあてはまる。

インターネットに代表される最近の技術革新は、人々の選択肢を広げ、取引を切り替えることを容易にした。その結果、競争は激化し、人々の雇用や所得は不安定になったのである。

技術革新の担い手は、「変人」と「精神分析家」である。変人とは、ある特定の媒体において新しい可能性を見つける能力をもち、その可能性を発展させることを喜びとするような人たちである。精神分析家とは、人々が気づいていない欲求や、まだ存在しない製品に対する願望などを見つけだす才能をもっている人たちである。彼らに対する需要は増え、所得も増加した。逆に、定型労働の需要は低下し、所得格差は拡大した。

より良いものの選択が容易になった影響は、通常の商品やサービスにとどまらない。居住地や学校の選別も進む。選別メカニズムが効率的になると家庭やコミュニティは蝕まれていく。

人々は計測が容易で分かりやすいものを重視しがちである。その意味で、「経済的ダイナミズムと社会的平穏のバランスに関する真剣な議論が必要である」という著者の主張は重要である。最終章で提示されている社会的バランスを取るための具体的な改革案は、日本にも参考になる。